

夢に向かって

二年 渡部 陽子（平成十年度）

この世界には、いろんな人がいます。視力がない人。聴力がない人。手足が不自由な人。病氣にかかっている人。

去年、障害者の弁論大会がテレビで放送されていました。たまたまテレビをつけていた私は、その番組にいつの間にか見いつていました。しばらくするとある女の人が弁論をはじめました。その人は口を思うように動かせないのです。堂々とした姿でしたが、彼女の話し方に私はあきあきしてきました。もう見たくない。私は画面から目をはなし、ごろんと横になりました。その時です。私の耳に「夢」という言葉が飛びこんできたのは。私の体に電流が走りました。

障害者の人たちは誰かにたよらなければ生きていけない。たとえ、自分の夢を持つていたとしても、それを実現することはできない。そんな特別な見方をしてきたのです。しかし、彼女は違いました。自分の夢の実現に向かって精いっぱい生きているのです。私は自分の考え方をはずかしく思いました。

その番組を見てから、障害者の人たちの顔や体を見て笑っていたり、口まねをしたりする人を見かけると、自分の心の中にいかりがこみあげてくるのがわかりました。みんな同じ人間なのに。見た目が違うといっても考え方や喜びや悲しみ、苦しみは同じなのに。

自分たちとは何も違うんじゃないか。誰だつてできることなら健康でいたいと思つてゐるのに。何度もそんな気持ちになつたのですが、自分の思いを相手に伝えることができませんでした。その人たちは自分が大好きで尊敬している人たちだったからです。だけど、そんな人たちにも自分の思いを伝えたいと思

いました。思いを伝えることができる勇気のある人間になりたいと思ひました。

そんな時に出会ったのが手話です。

廊下に貼りだされた手話のポスターを見て、おもしろそうだな、と思ひました。早速、保健の先生に手話の本を借りて読んでみました。

みなさんは手話と聞いて、言葉を伝えるだけのもの、と思つていませんか。日本語の文をそのまま手話に訳すと、“星がたくさんある”と表します。日常生活で手話を使つてゐる人は、“星がたくさんある”とするそうです。この手話を見たとき、満点の星が目につかびました。手話というものは、言葉だけではなく、情景や感情も同時に伝えることができます。そして、自分の世界も広げることができます。

手話のことを学んでいくにつれ、これまでよりも手話が好きになり、もつと勉強してみたいと思ひました。そして、私が勇気を出せずに伝えられなかつた思いを、手話を通して表していったらと思うようになりました。

このあいだ、鑑賞教室で他の学校の生徒に車椅子を使つてゐる中学生を見かけました。大勢の中で大丈夫かな、と思つたのですが、その周りの友だちが車椅子を押してあげたり、通る道をあけてあげたりしてゐて安心しました。その光景を見ていて、こんな近くにも私と同じ考えの人がいる、そんな存在がうれしく、また、障害者の人に対して思いやりを持つて接したいという気持ちが強くなり、大きくなりました。

手話通訳士になること。前からの夢でもあつた、作家になり、目が不自由な人でも読めるような点字をのせた本を作ること。体が不自由な人でもくつろげる旅館を作ること。

私の夢はつきません。